

ボディは日産の高級色として知られるG30ミスティックブラックでオールペン。ウインドー周りのモールなども変更したかったが、純正部品が残っておらず、仕上げるのに苦労した。



ワイパーは撤去してボンネットにあったウォッシャーノズルもレスに。残った穴はしっかりとスムージングして純正然に仕上げているのもこだわり。ちなみに雨の日は乗らない（笑）。



8割はベース車のいいところを生かしたスタイルで、1990年代らしい全面ブラック基調という仕上げ方も絶妙。サイドウインカーレスだったりと、SVX好きにも刺さること間違いナシ！



ブレーキキャリパーはGC8インプレッサの純正キャリパーに変更。スバルのロゴを入れることでマイナー車のアルシオーネSVXであることを静かに主張することにも成功している。





→マフラーはピットブルでワンオフ製作したシロモノ。通常は一段となるテールエンドを二段積みへと変更することで、正体不明車に拍車をかける。アルシオーネSVX登場時の1990年代にはなかったエアサス完全着地×二段テールエンドの激インパクト仕様に！
↑精緻な曲げと溶接で実現したエキゾーストパイプは、覗かなければ見えないけれどもインパクト特大なループマフラーに。純正然なフォルムとハードなカスタムのギャップが枠だ。

純正マフラーを1段から2段に!



サイドの高さと合わせるためにバンパーを延長!

フロントバンパーはダクトの下部分で高さを25㎜延長。これはサイドとの高さをそろえるためで、アゴが上がって見える純正フォルムの補正として有効だ。ナンバープレートの位置は変更しており、残った穴はキレイにスムージング済み。

バズるStanceポイント





左右で違う表情を魅せるワークのホイール

エアフォースのエアサス、スーパーパフォーマンスキットをブラケット加工などで装着し、左右でデザインが異なるシーカーのホイールを合わせたこのスタンス感はバズる予感しかしない。スタンスとの相性のよさで知られるワークのシーカーは、リムもしっかり深いため、エアサスによる完全着地との相乗効果が大きく期待できるブランド。運転席側にディッシュのDT、助手席側にショートスポークのFDという相反する意匠で装着したことで、異なる表情を楽しめる足元となっているのがポイントだ。



バズるStance SPORTY CAR

ALCYONE SVX



パーツが稀有なマイナー車をエアサス完全着地スタイルに!

ベースカー	アルシオーネSVX　1993年型
オーナー	利國達也サン・40歳（石川県）
協力	PITBULL　☎0761-27-0809　https://pit-bull.jp
Special Thanks	WORK　☎06-6746-2859/048-688-7555/052-777-4512 https://work-wheels.co.jp

PHOTO／芝 修（オマドーン）　TEXT／酒井賢次

40ヴェルファイアの登場→速攻エアサス化&フルアーム化し、その実力を世間に知らしめた石川県のピットブル。もちろんハイレベルの技術なのだが、新型車を現代の技術とノウハウで料理した、いわば王道的カスタムだ。だからこそ次はマイナー車で実力を証明したいと、ピットブルは次の一作を虎視眈々と狙っていた。そんなとき偶然手に入ったのが、このアルシオーネSVX。1990年代初頭にコアなファンを唸らせたジウジアーロデザインの2ドアGTカーである。

コンセプトはズバリ、エアサスによる完全着地。アルシオーネSVXの特徴的なボディラインは生かしつつ、ほかにはないインパクトを込めたのがそのこだわりだ。一見すると車種不明、しかし低くてカッコいいを実現させた。

とはいえ経年のマイナー車なので部品が少なく、純正部品も手に入らないため、仕上げるのにはかなり苦労を重ねた。エアサスはエアフォースをチョイスしたが、ブラケットを加工したり、スバルロゴを入れるためにインプレッサGC8の純正キャリパーを流用したりと、ボディやフレームの加工も含めた細かい部分にまでこだわりが詰め込まれている。

そんなインパクト特大な完全着地スタンスのオーラをさらにワンランク引き上げているのが、左右でデザイン違いを履きこなしたホイールのコーディネート術。車体右側にはパワー感とカタマリ感に長けたシーカーDTを9Jの IN27で、左側には躍動感も備えたシーカーFDを9・5JのIN22というインセット違いで投入。1990年代の車両に18インチという選択肢は当然ながらバツバツで、リムも深いからその破壊力はバツグン！　豪快な完全着地に表情が異なる2種のスタンス王道ホイール。この足元、バズる気配がプンプンだっ!!